

世界に平和を・戦争の基地はいらない

羽村平和委員会発・横田基地ミニ情報 2011.5.25 No.106 連絡先 FAX 042-555-1911



弾道ミサイル防衛に 反対を！

「防衛省・自衛隊は、弾道ミサイル防衛の態勢を強化するため、ことしミサイル防衛の司令部をアメリカ軍の横田基地に移転」と今年1月、NHKも報道しました。ミサイル防衛とは、日本に向けて飛来してくる弾道ミサイルを、海上のイージス艦の SM3 発射と、入間基地など全国に配備されている PAC3 発射の2段階で撃ち落とす仕組みです。しかし、本当に撃ち落とせるかは疑問です。日本はミサイルが飛んでこない平和外交をめざすべきです。



北朝鮮は何をするかわからないから、ミサイル防衛などの抑止力が必要と言ひ、先制攻撃もやれ、と言う人がいます。

朝鮮半島を南北に分けてたたかわれた朝鮮戦争の犠牲者は300万人はるかに超えるそうです。いま、朝鮮半島で武力紛争が起これば日本、中国はじめ東アジアは大変なことになります。

1993年、北朝鮮が核不拡散条約から脱退、核開発問題が表面化したときアメリカは、北朝鮮の核施設を爆撃することを検討しました。しかし、米参謀本部のシュミレーションでは、90日間で米韓の軍民あわせて100万人が犠牲になることが明らかになり、米参謀本部長は、もしここで軍事作戦がおこなわれれば「第2次世界大戦や朝鮮戦争のようになるだろう」と述べたそうです。

また韓国軍の委託研究では、北朝鮮の核施設が攻撃されただけでも「日本が含まれる400^{キロ}から1400^{キロ}の範囲で、放射線量は一般の人の年間許容量を大幅に上回る」との結果が出たそうです。日本には54基、韓国にも20基の原発があります。ミサイルが飛び交う状況をつくってはけません。ミサイル防衛は軍事産業を大儲けさせています。軍事力で平和は守れません。

(上の写真：第26回の横田基地撤去の座り込み。日高市からマイクロバスで19名の参加がありました。

建物の写真：東京平和委員会の提供。航空自衛隊航空総隊司令部棟に航空総隊のマークがつけました。)

原発作業員の命と健康が おそろかにされている

東京電力は14日、福島第1原発の集中廃棄物処理施設で機材を運搬していた60代の男性作業員が体調不良を訴えて意識不明となり、病院に運ばれたが死亡したと発表しました。体調不良を訴えた男性は医務室に運ばれましたが、1人しかいない勤務医の勤務時間（午前10時～午後4時）外だったため、東電社員の「医療班」が応急手当をしました。男性が体調不良を訴えてから病院に着くまでに2時間以上かかっていたことも分かりました。危険にさらされている原発作業員の医療体制はどうなっているのでしょうか。あまりにも無責任な体制です。東電は14日夜の会見で「診察できる医師を近くに置く態勢を検討したい」と述べたそうです。

田村智子議員(共産党)は20日、国会の集中審議で、作業員7400人(16日現在)中、内部被ばくを測定したのは1400人、被ばく量が判明したのは40人しかいない実態を明らかにしました。

『原発がどんなものか知ってほしい』 (平井憲夫氏)

(No. 106 の裏面)

平井憲夫さんは20年間、原子力発電所の現場で働いていた方です。1997年1月逝去されました。「私はプラント、大きな化学製造工場などの配管が専門です。20代の終わりごろに、日本に原発をつくるというのでスカウトされ、原発にいきました。一作業員だったら、何十年いてもわかりませんが、現場監督として長く働きましたから、原発の中のことはほとんど知っています。」という平井さんは、原発の「安全」は机上の話といいます。(抜粋して要約)

▼原発の設計が優秀で、二重、三重に多重防護されていても、これは設計の段階まで。現場で設計通りに造れる職人が少ない。経験不問で全くの素人を募集してる。東京電力福島原発では、針金を原子炉の中に落としたまま運転していて、一歩間違えれば大事故になっていた。

原発建設現場に職人が少なくなってから、素人でもつくれるように工事がマニュアル化されるようになった。事故や故障が頻繁に起こる原因のひとつ。

▼原発は放射能の被曝の問題があって、後継者を育てることができない。作業現場は暗く熱く、防毒マスクもつけていて互いに話すこともできない、身振り手振りでは技術も教えられない。例えば溶接の職人は目がやられ、30歳すぎたら細かい仕事が多い石油プラントでは働けなくなり、日当が安くても原発の方に行くことになる。素人がつくる原発だ。

▼名ばかりの検査・検査官…出来上がったものを見るのが日本の検査で、施工の過程を見ない。技量のない検査官が、メーカーや施主の話聞き、書類が整っていれば合格。これが実態。

▼原発の事故が頻繁に起き出したころ、運転管理専門官を各原発に置くことが閣議で決まった。原発の新設や定期検査のあと運転の許可を出す役人だ。ある役人が水戸で講演、「実は恥ずかしいんですが、まるっきりの素人です」と発言。自分たちの職場の職員は被曝するから現場に出さないとも言った。昨日までは養蚕の指導、ハマチ養殖の指導、お米の検査をしていた農水省の役人が多かった。

▼役人の下に原子力検査協会の人がある。協会は、通産省(現経産省)の天下り先である。全然畑違いの人だが、大変な権限をもっている。この協会の下に電力会社があり、その下に原子炉メーカーの日立・東芝・三菱の3社があり、このメーカーの下に工事会社がある。上の方は素人なので、原発事故も電力会社ではなく、メーカーでないと詳しいことは分からない。

▼天下りや特殊法人ではなく、本当の第三者的な機関、通産省は原発を推進しているところだから、そういう所と全く関係ない機関をつくって、その機関が検査をする。検査官は、配管のことなど経験を積んだ人、現場のたたき上げの職人が行えば、溶接の不具合や手抜き工事も見抜ける。とずっと言ってきたが変わらない。日本の原発行政は、あまりにも無責任でお粗末。

▼いいかげんな原発の耐震設計…阪神大震災後に、慌ただしく原発の耐震設計を見直したが、「どの原発も、どんな地震が起きても大丈夫」というあきれたものだった。1993年に女川原発の1号機が震度4くらいの地震で出力が上昇、自動停止した。震度5で止まるような工事をしてたのに震度4で止まった。設計通りに止まらなかったのが問題で、震度5でも止まらない可能性もある。

▼定期点検工事…原発は1年くらい運転すると、止めて検査をすることになっている。原子炉には70気圧とか、150気圧とか、ものすごい圧力がかけられている。配管の中には300度Cもある熱湯の水や水蒸気がものすごい勢いで通っているから、配管の厚さが半分ぐらい薄くなってしまう所もある。そういう配管やバルブを定期検査で取り替えるが、この作業に必ず被曝が伴う。原発は1回動かすと中は放射能、放射線がいっぱいで、その中で人間が放射線を浴びながら働いている。そういう仕事をする人の95%以上がまるっきりの素人。お百姓や漁師の人が仕事が暇な冬場などにやる。作業現場に入る前に、その日に浴びてよい放射能の量で作業時間が決まる。放射能の量が違うので作業できる時間が分刻みで違う。時間になるとアラームメーターが鳴るようにしてある。時計は持って入らないので作業中も時間ばかりが気になる。ネジを対角線に締めるのも、素人なのでいい加減になる。すると、どうなるか。定期検査が終わると、放射能を含んだ水が何10トと海に流れてしまう。(以下続く)